

森の話その6「森に暮らす」

ふくしま県民の森をつくったわけ

ふくしま県民の森は、人々が森とのふれあいを楽しみながら自然の大切さを学ぶ場とすることを目標として福島県が整備し、県の委託を受けた団体が運営に当たっているものです。この目標のために人々がこの森で実際に何をするのか、実践面から捉えたものに、「森林（もり）に遊び、森林に学び、森林に働き、森林を守り、森林に暮らす」という標語があります。しかし、まだよく掴み難いところがあって消化不良を起こしそうです。とくに最後の「森に暮らす」が何を意味するのか？ 県民の森にはキャンプ場があるのでそれを利用しようということだとすれば分らないこともないけど、「森に遊び」以下の4つを受けて、もっと深い意味がありそうです。

「森に暮らす」は、最近の自然嗜好の風潮を受けてあちこちでよく使われている標語です。しかし、その中身はいろいろで、行ってみたら期待外れだったなどということもままあるかも知れません。実は、ふくしま県民の森の場合も確固とした既成の理念があってそれを押し付けるのではなく、そこはお客さまといっしょに考えていきましょうといった柔軟なニュアンスのものなのです。

「森に暮らす」は、現今盛んなだけでなく、昔からさまざまな試行があります。今のはどうもキャンプ場の宣伝の臭いがするものが多いのですが、昔のはそんなことはありませんから、まずは純粋なものともみてよいでしょう。それだけに今に通用しない面もあるとは思いますが、一、二の例を引いて「森に暮らす」を考えてみたいと思います。

文覚（もんがく）

仏教には、開祖のお釈迦様を始めとして山野にこもって修業した話がたくさんあります。県民の森にも文覚上人の話があります。文覚は平安末期から鎌倉初期にかけて生きたお坊さんです。「石橋を叩いて渡る」ということわざがありますが、文覚はその正反対で、かなりの行動派だったようです。このために平家物語や源平盛衰記などにちょっとずつ登場しております。京都の神護寺は、和氣清麻呂（わけのきよまる）で知られる和氣家のお寺で、空海が住持を勤めたこともあります。平安末期には見る影も無く衰退していました。文覚は持ち前の強引さで寄進を集めて立て直したのですが、集め方があまりにも強引だったため後白河法皇の怒りをかって一時伊豆に流されました。そこで同じく流罪の身であった源頼朝と意気通じ、その挙兵を助けたのでした。そして、源氏の代を迎えて神護寺の復興も軌道に乗ったということです。

若い頃は京都御所北面警護の武士団に属し、遠藤武者盛遠を名乗っていましたが、故あって出家し、諸国を巡って身を削るような荒行に専念します。その流転の先は出羽（山形県）の羽黒山にも及んだということです。文覚に関する言い伝えは地方の側にもあり、近いところでは宮城にも福島にもあります。福島の場合、文覚は本宮の大名倉山の岩屋でし

ばらく修行を積み、それからさらに北に向かい、杉田川を渡ったところでその流れに不動明王を意味する梵字（ぼんじ：古代インド文字）が浮かんだのを見て、杉田川をさかのぼり、岩屋と滝を見つけ、そこで滝に打たれての修業を積みました。その後、文覚は立ち去りましたが、滝は遠藤ヶ滝と呼ばれるようになり、土地の修業の場となりました。滝近くには大きな石室があり、険しい谷底の道には不動明王を祭るお堂や石碑、女人堂の碑などがあります。滝や石室のある修業の場は、



遠藤ヶ滝と溶岩層の断崖

昔は女人禁制で、女性はその手前の女人堂で経を読み、祈りをささげました。今ある女人堂碑はその名残りです。また、お不動様には赤、青、黄色などの色のものがありますが、ここのは赤不動です。お不動さまは剣を持ち怖い顔をしています、これは怠けて仏の教えをないがしろにする人々に対する仏の戒めの姿だといわれています。

さて、自然のなかでの荒行が何を意味するのか難しいところですが、人の世のいろいろなしがらみや先入観から己を解放し、己の本当の心を取り戻そうとする営みだという人がいます。その結果として見えてくるのは、悟りの世界観、すなわち、冷たくて危険がいっぱいのこの自然界に人類が誕生してこの方、2万年の生を繋いで来られた人間本来の戦略と、それにもとづく生のイメージだということです。

ヘンリー・ソロー

ソローはソーロウとも書かれています。わが国でいえば江戸時代の末期、アメリカ合衆国は北東部マサチューセッツ州中心に活動した思想家です。詩人、自然誌エッセイストでもありました。とくに注目されるのは、1845年7月から1847年9月まで、2年2ヶ月にわたり人里離れた森の中でたった1人で生活してみたことです。その報告はソロー自身の著作「ウォールデン」として刊行されています。ウォールデンは彼が住んだ森の小屋の前に広がっていた湖の名前です。この本は世界中で読まれており、邦訳書も明治以降十指に余ります。ここでは神原栄一訳「森の生活」（1983年）でみてゆきます。

ソローは、父親が鉛筆の製造と販売をやっていたのでその手伝いをしながら詩やエッセイを書いて生活していて、彼自身の定職といえるものはなかったようです。彼の森の生活で人々がまず知りたかったのは、必要なお金はどうしていたのか、何を食べていたのかということでした。「ウォールデン」の内容は18の項目から成りますが、ソローはその第1項目「経済」で疑問に答えています。そこでは、人々の生活が余分なものに満ちていて、そのために働き尽くめとなり、肝心の生きる理念の追求のための時間がなくなっているといっています。その余分なものを取り除けば、かかる経費は知れたものだということです。

「私（ソロー）はこの町の若者によく会うのだが、相続によって働くはめになった畑がどんな所かをもっと澄んだ目でみるためには、広々とした原野に生まれて、オオカミの乳で育てられた方がよかったのである。なぜ彼らは 60 エーカー（24.3 ヘクタール）もの土地を抱え込んで苦しまなければならないのか？」

「われわれはみな贅沢に囲まれていながら、無数の原始的な慰めという点では乏しい生活をしている。チャップマンの歌うとおりのだ。——偽りの人の世よ、この浮世のおごり故、天来の慰めはみな薄れゆく——」

1845 年の 3 月末、ソローは、もっとも近い隣人から 1 マイル（1.61km）離れたウォールデン湖近くの森で、小屋を建てるため、借りた斧で木を切り始めます。柱や垂木（たるき）はそれで準備できました、板や窓枠などはすでにあつた小屋をアイルランド人から買い取って調達しました。

「5 月の始め、必要からというよりも隣人愛を深める好機とばかりに家の棟上をした。7 月 4 日、板を張り、屋根を葺くと、すぐこの家に住みはじめた。こうしてきちんとした、こけら板葺き、漆喰塗りの家が自分のものとなった。間口 10 フィート（3m）、



奥行き 15 フィート、高さ 8 フィートで、屋根裏部屋、押入れ、両側に 1 つずつ大きな窓、2 つの落とし戸、一方の端に戸口、その反対側にレンガの炉があつた。……自分の手間賃は除外して、かかった経費は 28.13 ドルで、毎年支払っていた家賃よりは安く生涯のすみかを持てるものだということが分つた」

さて、それから始まった森の生活 2 年分の出費は、家の建設分を含めて 62 ドル、その間に、小屋の前の 2.5 エーカー（1 ヘクタール）ほどの砂地で、ソラマメ、ジャガイモ、トウモロコシ、エンドウマメ、カブなどをつくり、自家用の食料とするかたわら販売もして得た利益や、測量、大工等の日雇い労働で得た収入は合計で 36.787 ドルとなり、差し引き 25.22 ドルは、当初持っていた資金とほぼ同額であつたと報告しています。

食べていたものは、ライ麦、トウモロコシ粉、ジャガイモ、米、塩豚（少量）、糖蜜、塩（少量）などで、このための出費は 10.74 ドルで、さきの 62 ドルのうちに入ります。ソローの森の生活は、贅沢はせず、読書や自然観察に励み、心行くまで思索し、あまった時間で畑の除草や、町に出て日雇い労務に励むといった生活でした。

さて、「ウォールデン」の第 2 項は「住んだ場所とその目的」というもので、住んだ自然を賛美する記述はまことに珠玉のような詩情に満ちています。

「サンスクリットの詩篇の一つハリバンサに、鳥のいない住まいは、味付けしていない肉のようなものとある。私の住まいはそんなものではなかつた。自分がたちまち小鳥の隣人となっているのが分るのだから。それも小鳥を鳥籠（かご）に閉じ込めておいてではな

くて、私自身が小鳥の近くで籠に入っただけのことである。」

「朝は英雄の時代をよみがえらせる。戸と窓を開け放して座っていると、空が白みはじめる頃、部屋を飛びぬける、目には見えず、その姿も想像できない1匹の蚊のかすかなうなりに心を動かされた。それは、高らかに名誉をほめたたえるいかなるラッパの音に負う感動にも劣らないものであった。それはホメロスの鎮魂歌であった。蚊そのものが自分の怒りと放浪を歌って天駆けるイリアスであり、オデッセイアであった。そこにはなにかしら宇宙的なものが感じられ、世界の不滅の活力と豊穡（ほうじょう）とを知らせていた。」

「私が森に行ったのは、慎重に生きたい、そして人生の本質的な事実だけに会って、人生が教えようとしているものを学びとれないものかどうかを知り、死ぬときになって自分が生きなかったことを発見するようなことがないようにしたい、と思ったからである。」

「ウォールデン」の第3項は「読書」です。読書は、自然観察と並ぶ森の生活の主要素です。ここでソローは、詩人ミル・マストの言葉、「座しながらにして精神界を駆け巡ること……この利益を私は本で得た。わずかグラス一杯の酒に酔うこと……この楽しみを私は深遠な教義の酒を飲んで経験した」を引用しています。

第4項は「音」です。ここでは、さきの読書を補うものの必要性を記述しています。

「どれほど申し分なく選択された歴史、哲学、詩の課程でも、また最も優れた人との交友、最も見事な生活の手順でも、見るべきものを常に見るといふ修練に比較すれば、何の価値があるだろうか？ たんなる読書人、学問の徒になろうとするのか？ それとも物を見る人になろうとするのか？ 自分の運命を読み取り、眼前のものを見るのだ。そして未来に踏み込んでゆくことだ。」

「私はフクロウがいてうれしい。人間のために白痴的な、間違いじみた声で「ホーホー」と鳴かせておこう。その声は日中の光を知らないたそがれの森に見事に調和し、人間がまだ認めていない広大な未開拓の自然の存在を暗示している。」

第5項「孤独」、森の小屋に訪問客は稀である。ソローはそうした孤独を楽しんだ。

「哀れな人間嫌いの人、非常に気分の憂鬱な人でも、きわめて美しく優しい、そして最も無邪気で、人を元気づけてくれるような交わりを、あらゆる自然物に見出されるものであることを私は体験した。」



「私が寂しくないのは、ちょうど大声で笑う湖のアビヤ、ウォールデン湖そのものが寂しくないのと同じだ。その紺碧の水には憂鬱魔などはいない。そこには青衣の天使がいる。」

さて、第6項「訪問者」、以下「豆畑」、「村」、「湖」、「ベーカー牧場」、「より高度な法則」、「動物の隣人たち」、「暖房」、「先住者——そして冬の来訪者」、「冬の動物」、「冬の湖」、「春」、と進んで「むすび」となる。

「私は自分の実験で少なくとも次のようなことを学んだ。……人は自分が抱いている夢に向かって自信をもって進み、自分の思う生活をしようと努力すれば、ふだんは予想もしていないような成功に出会うものである。何かを後に残しつつ、目に見えない境界を越えて進んで行けるだろう。新しく、普遍的で、いっそう自由な法則がその周囲や内部に確立しはじめるだろう。あるいは、今までの古い法則を拡大してさらに自由な意味で自分のためになるようにそれを解釈し、存在のより高度な秩序に認可されながら生きてゆけるだろう。孤独は孤独ではなく、貧困は貧困でなく、弱さも弱さではなくなるだろう。楼閣は空中に築くべきで、今度はその楼閣の下に土台をすえてやることだ。」

人類がこの自然界に誕生したとき、たとえばサルは木登りがうまく、シマウマは走るのが速く、ライオンは鋭い牙や爪をもっていたのと異なり、身体的にはこの世に生きるべき何の特技も持っていませんでした。通常の生存競争の原理からすれば、たちどころに淘汰されて消滅する運命にあったわけですが、それが生きながらえたいきさつは、今の機械文明の中に生きる人類からは窺い知れません。文覚やソローのように、現今の皮相な虚飾をめくり、原始時代の裸の人類に戻って自然のなかで体感してみることだと思います。標語「森に暮らす」はそんな内容を含んでいるように思われます（文責榎村）。

その6 終わり